とらぶるきゃっちゃー♪

Glacier

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とらぶるきゃっちゃー♪

【Ｎコード】
Ｎ３１６１Ｇ

【作者名】
Ｇｌａｃｉｅｒ

【あらすじ】
適当な会社に就いて、適当に結婚して普通の生活を送ることが出来ればいいやー。なんて思っていた俺は、高校の時、些細なコトで“花園香織”と出会った。コイツがまた厄介事によく巻き込まれるんだよ。そんで、俺がつけた第二の名前は『トラブルキャッチャー』。これは、普通に過ごせなくなった俺とその周りの人々の日常の物語――――――

とらぶる1…ここはどこ？　なんでしばれて？（前書き）

どうも、グレイシャです。

非常に困ったことに、父のメインサーバーに私のパソコンが接続不能になっておりますｏｒｚ
なので以前別の掲示板にて書いていた作品を修正、加筆して書いていこうと思います。

繋がれた手を読んでくださっている方々には本当に申し訳ないですｏｒｚ
サーバーにつながり次第、すぐに執筆を再開しようと思いますので今はこの作品を楽しんでもらえれば幸いです。

とらぶる1…ここはどこ？　なんでしばれて？

相対性理論。

理科や数学は嫌いな訳じゃないが、俺はこれについてそう詳しい訳じゃない。

“アルベルト・アインシュタインの創始した理論で、一九〇五年に発表された特殊相対性理論と、一九〇六年に発表された一般相対性理論との総称である。前者は互いに、つまり相対的に等速運動する座標系の間では物理学の法則が不変な形を保つという原理にもとづくものであり、後者は前者に互いに速度を上げたり下げたりする加速運動や重力をも取り入れて一般化した理論である。単に相対論（ｒｅｌａｔｉｖｉｔｙ）ともいわれる。”

基本の知識。これだけは知っているが……。

大体、あるかも解らない訳で、そんな不確定要素が多い理論を信じろと言われても困る。俺は信じてない訳でもないが、信じてる訳でもない。実証されたら『あぁー。本当にあったんだー』ぐらいで終わると思う。いや、確実にその程度で終わるな。

しかし、そんなくだらん（実際には物凄く凄い理論なんだろうけど）ことを実証するような暇があるんだったらまず地球温暖化をどうにかしてほしいね。クーラーのない俺の家は夏になったら生き地獄と化する。実際問題、南極やら北極やらエレベストやらの氷河が溶け始めているじゃないか。今沈んでいる国だってあるのに……。

まぁ、普段俺はこんな真面目に考えている訳じゃない。道を走っている車を見ても何とも思わないし、誰かが頑張って相対性理論を実証しようとしても頑張れとしか思わないしね。

ところで君。一つ質問だが、“寝ていて起きたら何かキツい体制で狭い箱に入っていた”という経験をしたことがあるかい？

俺？　俺はあるよ。なんつったって、今まさにその体験をしてい

るからね。
「いいネオン。だからこの理論さえ解明されれば車だって空飛べるようになるかもしれないのよ。そんな偉大な理論を実証する人物がこんなに近くにいるのに、“コイツ”は何とも思ってないのよ！大問題よ大問題！　地球温暖化が進んで全ての氷河が解けて地球の海と陸地の比率が九対一になるぐらい大問題よ！！」
「……」
……。
何を誰に熱弁しているんだ？　この状況から察するに、“アイツ”に巻き込まれた人間がもう一人いるのか。ご愁傷様。
まぁいい。さて、俺は今こうなっているが、どうしてこんなコトになっているかを思い出すとしようか。
確か、俺は時空と連絡を取っていて……

＊　＊　＊

『僕の家で？』
「うん。俺ん家寒くて寒くて仕様がないんだよ。もうその寒さでネオンちゃんに抱きついて温もりを得ようかとか危険なコトを考えてしまってさ。友人にそんな変態がいたら君だって困るだろう？」
『そりゃ、困ったね。別にそんな変な言い訳しないでもいいのに。君なら本当にやりかねないから怖いよ。そんな危険なコトを、冗談でも言ってほしくないね』
実に酷い物言いだ。俺はそんな変態じゃないぞ。まぁ、寒さで脳がやられて気がおかしくなったらやりかねないかもしれないが……。
『さて。それじゃあいつから僕の家に？』
「信じてたよ親友。心の友よ。んじゃ早速今から――――」
コンコン。

「……」
ノックの音に、俺は黙り込む。何故なら、それは“奴”が来たのかどうかを調べるためだ。
もしも“奴”だった場合、あと五秒もすれば俺の家のドアをぶち壊そうとヒャクレツケンのスピードでノックをしてくるはずだからね。
『？　どうしたのさ青空』
「いや。お客さんだよ」
電話を耳に当てつつもドアを凝視し、そちらの方へと意識を傾ける。
四、三、二、一――――
大丈夫か。
俺は携帯電話を肩にかけて「今出る」と答えてからすくっと立ち上がり鍵を開けようとドアへ向かった。
「悪いね。今開けるよ」
“アイツ”でないと思い込み、時空との通話を切らずに鍵を開ける。ガチャリとロックが解けた音がし、ドアノブに手をかけたその瞬間――――
バチンッ！
あれ？　何この音？　まるで電気が弾けたような音だけど……？
なーんてのっそりと考えたと同時に物凄い衝撃が俺の体を駆けめぐり……そこからの記憶はない。

＊　＊　＊

……オイオイオイオイオイオイオイオイ。肝心な記憶が抜けてるじゃないか。俺の記憶力は鶏並みだと言われたことはあるが、否定しちまったぞ。今更訂正すんのはいやだぜ？
俺がどうやって言い訳しようかと考えていたとき、花園以外の人物の声が聞こえた。

思考を停止し、耳を済ませる。
「その大きなのには、何が入ってるの？」
おお、その声は……ネオンちゃんじゃないか。君か、君なのか。よかったよ。俺を孤独にしないでくれるのは君だけだよネオンちゃん。
一応、大体の状況は飲み込めてきたぞ。現在、俺はどうやら旅行とかに使う大きな荷物入れに入れられているらしい。予想だけどね。で、俺の体は何とガムテープで両手両足を縛り上げ、オマケに口、さらには目の部分にもガムテープが貼られているではないか。耳が塞がれなかったのが唯一の救いだぜ。
そして、この“ガタン、ガタン”という音から電車やら新幹線やらに乗っていることが推測される。オイ、お前料金俺の分払ってねぇだろ？　俺は犯罪者になりたくないぜ。もしバレても責任はお前のもんだからな。俺はこれっぽっちも負ってやらんぞ。
で、外には俺の知っている人物が約二名いると思われる。まずは第二の被害者、ネオンちゃん。可哀想に。ご愁傷様。そして、俺を拘束した人間。もう誰か解っていると思うが言わせてくれ。トラブルキャッチャーこと、花園香織だ。
「ん？　これ？　これはお荷物よお荷物。そうね、雑用係とでも言ったら解るかしら？」
「そう」
そう、じゃねぇよ。ネオンちゃん、もっと他に言うことあるだろ？　『毎回毎回巻き込んでいいんですか？』とか、『可哀想じゃないんですか？』とか。君は小学生の頃道徳を習っただろ？
ここでピロリローとか何とかアナウンスを告げる音がした。ふむ、これは新幹線のようだ。後に車掌さんからの報告が入る。ッチ。こっからじゃ聞こえねぇ。車掌さん、耳が不自由な人のことをちゃんと考えようぜ。そうすりゃきっともっと客さんが入るよ。いや、入りすぎて困ってるかもしれないけどな。
「そろそろ降りるみたいよネオン。準備しなさい準備。本当なら“

コレ”に持たせるとこだけど、今回ばかりは仕様がないわ。あ、それと理恵姉ちゃんも起こして」
「……」
暗黙の了解ってやつかネオンちゃん。てか理恵さんかよ今回の首謀者は。何回も言ったじゃないですか『コイツがおもしろそうと思うようなこと吹き込まないでください』って。
俺がスペースのない場所で頑張って頷こうとすると楽しげな花園の声が聞こえてきた。
「さっ、ついたわよ。降りる降りる」
「んにゃ〜。張り切ってるわね、香織。私もそう張り切ってくれるなら今回の旅行を計画した甲斐があったというものだよっ。うれしい限りだ」
悲しい限りですよ。理恵さん。
って言うか旅行って何ですか？　俺は何も聞いてませんよ？　理恵さん？
「いざ、旅館に出発！」
「おーっ！」
「……」
ガクンと俺の入れ物が揺れる。かなり無理な体勢をとっているため、すべての筋肉が悲鳴をあげてつりそうになっているということをきっと彼女らは知らない。
あぁ。これ小説とかでよくある夢オチだったらいいのになぁ……。
そんな淡い希望から目を覚ませというように箱が大きく揺れた。全身を打ち付けられ、悲鳴じみたうなり声をあげる。
いや、実際には悲鳴をあげたつもりだったんだけど。
……神様とやら。もしいるのなら、ひとつだけ願いを叶えてください。
どうか、わたしくめに平穏な冬休みを……

とらぶる1…ここはどこ？　なんでしばれて？（後書き）

相対性理論についてはウィキペディアより引用しました。

とらぶる2…解放されたけど？

さてさて。あれから揺り籠でゆられ続けること約二時間。このままいくと吐いちゃう吐く、吐いちゃう！　なんて真面目に心の中で叫んでいたとき、ようやく箱は開いた。

眩しいすぎるぐらいの日の光が俺を照らす。……いや、根拠はない。ただ箱が開いたから言っただけだ。

今、俺はどんな顔をしているのだろう？　再び光を浴びることが出来るから泣いているのかもしれないし、気分が悪すぎて蒼白になっているのかもしれない。

まぁ多分、いや確実に。もうすでに俺はやりきったぜ、見たいな疲れた顔をしているに違いない。ああ。間違いないね。

ベリベリとガムテープがはがされていく。まずは目の部分だ。端っこの部分が髪に引っ付いてる。イテテテテ。イテェ！　待て！　自分でやる自分で！　痛い痛い！

自分では、精一杯声を出したつもりだったが、残念ながら全く分からなかったみたいだ。んーんーんー！！　と叫んでいる変人に見えたに違いない。

っく。耐えろ俺。きっと将来、素晴らしい出来事が待っているはずだ。この生き地獄に耐え切ったご褒美にきっと可愛い美少女やら可愛い美女やらに合わせてくれるに違いない！　きっとそうだ！　じゃねぇと釣り合わねぇぞ。もし会えなかったら俺は神を呪う。神やら仏やらなんて信じてないが、とにかく非科学的でも呪ってやる。

目に光が……。ああ。俺は生きている。ようやくここで実感できたぜ。こんなにも日の光が暖かく感じたのは初めてだ。うれしいなぁ。きっとこれからいいことが待っていると神からの報告なんだろうなぁ。

そんなコトを呑気に考えていると、ついに口に貼られていたガム

テープがはがされた。言いたいことが多すぎて俺はまず何を言えばいいのか、その選択にこまる。そして、結局俺が選び抜いた第一声は、

「テメェ。一体これはどういうことだ？　そしてここはどこだ？　それと近くにトイレないか？　マジ気分悪いんだけど」

「うるさい。アンタは一生アタシの奴隷として生きていくんだからこれぐらいで弱音吐いてんじゃないわよ」

……奴隷？

オイオイ。ここは二百年前のアメリカか？　そして俺の役は黒人？　そしてお前は白人か。

なぁ、そこの無口なリンカーン役美少女よ。奴隷解放の宣言を出して俺を開放してくれよ。

あなたでも構いません。理恵さん。あなたがコイツを何とかしてください。いやニヤニヤしてないで。

そんな俺がヘルプ信号のつもりで送っていた視線は軽々と無視され、俺のピュアなマインドは壮絶に傷ついた。この傷は美少女メイドさんにでも会わない限り治りそうにない。

「……俺は一応この件の怒りは抑えてやってるんだ。百歩どころか一兆歩譲ってだ。驚き。何と百億倍だぜ。それを譲ってだ。俺がさっき尋ねた三つの質問に答えろ」

「さて。じゃあ早速例の旅館に向かいましょうか」

両手両足に巻かれたガムテープをそのままにして、これで終わったと言わんばかりに立ち上がりネオンちゃんと理恵さんにレッツゴーと言った。

無視か。俺の存在はそこになかったかのような自然さで無視か。傷ついた心に追い討ち。泣きっ面に蜂。今の状況ほどあっている状況はないね。

ってかオイ。まさか俺はこのまま放置されるわけじゃないよな？

「ねぇ。俺は？」

「どうする？　そこら辺の足拾う？」
「うーん。でも京都のタクシーは喫煙可能だからねっ。距離もそんなにないだろうし、歩いてこうよっ」
「そうね。そうしましょう。ネオンもそれでいいわね」
「……」
うおぉー。壮絶なスルーが青空にクリティカルヒットだぜっ☆
なんて、マジで言ってる場合じゃねぇなこれ。

「お願いしますまず両手両足のガムテープ取っ――――」
「荷物は……うん。このままでいいわね。一番大きな荷物も消えたし、徒歩でも疲れないでしょう」
トントン拍子で進んで行く会話。この状況から察するに一番大きな荷物は俺だな。それはあんまりだろう？　俺は連れてって連れてって、って自分で望んだ訳じゃないんだぜ？
まぁ、それは置いておこう。全く、自分の心の広さに惚れ惚れするね。……っと。自分に惚れちまってどうすんだ俺。この後、美少女オア美女が俺を待ってくれているのに。
「じゃあ行きましょうか」
「うんっ！　行こっ！」
「……」
「おーい。約一名忘れてるぞー」
三人の視線がようやく俺に集まる。
「なぁ。俺は心は広い方だ。本当なら文句の一つや二つ、いや、数百から数千は許されるこの状況を、文句の一つもなしでいてやってるんだ。頼む。まずはこの両手両足のガムテープをはがしてくれ。出ないと俺はこのままこの人気のない場所に放置されっぱなしになってしまう。こんな人気のないところだ。下手したら四五日後には裏路地で死体が見つかったとかニュースになっちまうぜ。そしたらお前……一応残りの二人も犯罪者だ。それでいいのか？　小学生の道徳で習っただろ？　自分が嫌と思うことは他人にもやっちゃいけ

ないって」

「アンタ、なんでここにいんの？」

「――――」

マジで泣きそうになった。それほど地獄的な質問だった。

俺が聞きたいんだけどなぁ。

「冗談よ冗談。でも、ただ解くだけじゃ、釣り合わないわよねー」

「お前がこんなことしたんだろうがっ！」

「ふーん。なるほど。状況が理解できてないみたいね。それとも何？　自殺志願者？」

「……もしもお前が置いていって俺が死んだらお前は立派な犯罪者だぜ？」

「アンタが『このままにしてくれ』って言ったんでしょ。アタシ達は罪には問われないわ」

お前の耳と脳内の法律は一体どうなっているんだ？　少なくとも日本はそんな法律ないはずだ。そうであってほしい。

それと、さりげなくアタシ“達”って言うな。これはお前が悪い。

でも、笑って見てないで助けてください。理恵さん。そしてネオンちゃん。今そうクールでビューティしてる場合じゃないの分かるだろ？

「……どうすりゃいいのさ」

諦めよう。

「決まってるでしょう」

ずいっ、と俺の目の前に花園の荷物。

「雑用係」

「――――」

いいのか？　いいのか俺？　こんな簡単に了承しちまって。いいのかよ。プライドはないのか俺。

「分かったよ」
フフフフフ。そうだよ。適当に答えておいて持たなきゃいいんだ。俺天才？　いや、こんな簡単なコトが分からなかった馬鹿とも言うか。むしろ、そうとしか言わない？
しかし、花園は腕を組み、口をへの字に結んで俺の睨めつけた。
「アンタ、分かりやすいのよ。開放されたら逃げようって魂胆でしょ」
「っぐ」
図星。
「いや。もしかしたらアタシの分だけ持たないで残りの二人の分は持つ気だった？」
図星図星。
「それとも――――」
「分かったよ持ちますよ持ちます。持てばよいのでしょう」
これ以上何か言われるのも、何か疲れたので俺は渋々了承した。
大体、こちらは一文無しだ。どうしようもない。
花園は俺の返事を聞くと満足そうに笑みを浮かべ、よろしいと言ってから俺の両手のガムテープをはがし始めた。
バリバリとはがれる音があたり一面に広がる。
なんか、俺の今の心情とぴったり一致するような音だった。
両腕がようやく解放され、俺は自分の両足のガムテープをはがしにかかる。
途端。
俺の真横に三人分の荷物が置かれた。俺は思わず顔を上げる。
花園と視線があった。にんまりと意地悪そうに笑って、そのまま身を翻し、既に歩みを進めているネオンちゃんと理恵さんの元へ駆けていくのであった。
「……なんか、こういうコトになれちまってる自分も、ホントどうにかしてるよな」
人生のルート、間違っちまったなぁ。いや、七星が言ってた『人

生の通過点』に過ぎないのかな。
「なんにしろ、俺の人生は最悪だな」
自分の意見に、もっともだと頷き、もう見えなくなりそうになっている三人を慌てて追いかける俺だった。

とらぶる3・・・携帯とはどういう意味か分かりますか？（前書き）

えー、非常に今更だったりするんですが……えぇ。これは作者が自己満足するために書いた小説です。
ですから、一部文章がでたらめになってたりします。もしかしたら全部でたらめかもしれません。
書いてて楽しくなるような作品を目指して書いています。あ、もちろん、繋がれた手も楽しいではありますが、これはなんていうか……軽いノリで書けるっていうんでしょうか。

何が言いたいのか分からなくなりました。
では、これ以降はそういったノリが許せる方のみお進みください。

とらぶる3・・・携帯とはどういう意味か分かりますか？

両手&首&背中に三人分の荷物、プラス俺が入れられていた大きめのカバンを持ち、俺は三人の背中を見失わないように懸命に歩いていた。ック、社会人や学生の視線が痛いぜ。

時々、俺を見てクスクスと笑っていた高校生やら中学生やらがいたが、俺は精神的にも肉体的にも疲れきっていたんだろうか、もう何とも思わなかった。笑いたきゃ笑えよ。アハハハハ。

しかも、花園の歩くペースは普通の社会人の約一・五倍。物凄くファストなので俺の疲労加速度は相乗効果で約三倍近くなっていた。

足腰がやわな訳ではないのだが、この荷物の量と速歩きによって俺の足は既にピークを通り越している。恐らく、これらすべての荷物の総量は１０キロ程あるんじゃないだろうか。特に、花園。テメェ何かばんにいれやがった。

畜生。両手両足首両肩の感覚がなくなってきたぜ。ああ、なんか、綺麗な川が見えてきたような気がする。いや、気がしてほしい。綺麗な花がたくさん咲いていて、その上を蝶々がパタパタと……。

「……あれ？」

思わず、マヌケな声を出す俺。どうやら、もう余計なコトを考えている余裕はなさそうだ。

三人の背中が見えなくなっている。

「まずいな……」

取りあえず、突っ立っててもさらに三人との距離が開くだけだから俺は歩きながら携帯で花園と連絡をとることに。

と思ったが現在、両手は塞がっており、とても携帯を探せるような状態ではなかった。歩道の端により、三人分の荷物と例のカバンを置いて携帯を探す。

ありがたいことに、携帯はセーターのポケットに入っていた。
早速、花園に連絡をする。
プルルルという音が携帯から発せられた。よし。これで……。

不意に、後方で音楽がなった。最近流行りの音楽だ。

……不吉なコトに、それは何か携帯の着メロのような音楽であった。なんか、嫌な予感がするなぁ。
はたして、俺の悪い予感は的中するのであった。あの女、携帯をカバンの中に入れっぱなしにしてやがったよ。
クソ。まぁいい。お前なんか最初から頼りにするのが間違いだったぜ。頼りになるのは君だけだよ、ネオンちゃん。
ネオンちゃんの携帯に向けて電波を発信！　さぁ、希望へと届け！

後方で、非常に控えめな呼び出し音っぽい音がした。

何でだろう。俺は、解りたくもないのにその音が何の音か解ってしまった。
一応、確認する。
再び、予想的中。俺はこういう時だけ予感やら予想やらがあたんのかよ。どうせなら美少女との出会いや美女との出会いの予感を当ててほしいものだよ。
ど忘れしてたな。ネオンちゃんは俺の期待をことごとく裏切ってくれる少女だったじゃないか。
まぁそんなことは今はどうでもいい。今どうするかが重要だ。インポータントだ。打つ手がないぞ俺。
理恵さんなら携帯を持っているかもしれないが、俺は理恵さんの番号知らないし……。
ん？　待てよ。何も俺が知ってなくてもいいじゃないか。そうだよ、花園のアドレス帳に理恵さんの番号が入っていればいいんじゃ

ないか！
グッジョブ俺。天才だぜ。
早速花園のアドレス帳を覗く。通行人の視線が痛かったが、無視だ。
ええと。これだな。
俺は躊躇することなくアドレス帳のボタンを押した。
しかし、期待は簡単に裏切られた。
「……マジ？」

ロックがかかっていやがった。

「オイオイオイオイ。一年の初めから京都で迷子かよ俺。どんなスタートだよ」
虚しく俺の心に響く独り言。いや、もう言ってないとやってらんないからねマジで。
畜生。荷物持ってるウチは暖かかったけど、だんだんと寒くなってきたぞ。ヤベェ。
ック。本当なら時空の家でゆったりと勉強してたはずなのに……。
あれ？　てか時空は一体今どうしてんだ？　俺のコト、心配してんじゃねぇのか？
一応、かけてみよう。今は知り合いの声を聞いて安心したい。
素早く十一桁の数字を入力し、時空と連絡をとる。

『もしもし』
「やぁ時空。元気かい？　俺はもうダイイングだぜ」
『僕は元気だよ。君はお疲れのようだけどね。……それで、何のようかな？　今君は香織さん達とお泊まり会じゃなかったのかい？』
「お泊まり会？　なんだそりゃ。いや、そういや旅館って単語が出てたような……ってオイ。お前、その知ったような口、何？」
『うん？　そのことかい？　それはね、あの後君が応答しなくなっ

てさ、どうしたんだろうって思ってたら香織さんが代わってさ。“コイツはお泊まり会の雑用やらせるから。四日ほど借りるけど何か問題がある？”って聞いてきてね。取り分け君に用はなかったし、別にいいよって答えたんだ』

親友とも呼べる存在を売ったなテメェ。どんな目に会うかは貴様には何度も聞かせたはずだぞ。

『それでさ、香織さんについで来いと言われてね。“コイツ、アタシじゃ持てないからちょっと手伝ってくれない時空君”って言われてさ。香織さんとはまぁそれなりに面識があるしね。知り合いの仲ということでＯＫを出してさ。それで君をガムテープで縛ってから箱詰めして……』

お前も共犯かよ。ってか主犯じゃねぇか。

「ふざけるなよ……。お前それでも親友か！？　……まぁいい。ところで、期待はしてないんだが理恵さんの番号知らないか？　今非常に厄介なコトになっていてね」

『ふーん。もしかして、見知らぬ地で迷子にでもなったの？』

図星だった。

妙に勘のいい奴だ。

「どうでもいいだろ。それより知ってるのか知らないのか教えてくれよ」

『知っている訳ないないだろう。この僕が』

「ああ。言うと思ってたよ。だから期待してないとは言ったはずだぜ」

『ああそう。何か今日は冷たいねぇ青空。どうしてだい？』

「自分で考えろ馬鹿野郎」

通話終了。

なんか、余計に腹がたっただけだったぞ。しかも収穫はこの怒りだけ。

「あぁー。どうしようかなー。ネオンちゃんのアドレス帳に理恵さ

んの番号なんて入ってないだろしなー」
そう呟き、俺がガクリと項垂れているときに、俺の携帯が震えた。
携帯の画面を確認。ふむ。俺のアドレス帳に載ってない奴か。一体誰だろ？　いたでんだったら速攻で切ってやる。
「もしもし、青空です」
『やー！　むーちゃん生きてたかーっ。よかったよかった。行き倒れになってないかと心配したよ』
おおぉぉ。あなたか。あなたなのか俺の救世主は。
「理恵さん……。助かりました。連絡がとれなくてどうしようかと思っていたところです」
『そうかいそうかいっ。私達はもう旅館についてるよ！』
くたばってください。
言いかけて、止めた。

「旅館、どこですか……」
『あー、場所言うの面倒いからタクシー拾って来てくれって香織ちゃんが』
「お金は？　俺は言っておきますが一文なしですよ？」
『んー？　ちょっと待ってね』
どうするー？　むーちゃんお金ないってよー、と小さく聞こえる。
その後、なんかガミガミと花園が喋って入るのが聞こえた。
『んー。じゃ歩いてこいって』
お前もう俺を連れてくんな二度と。
「えーと。俺は道、解りませんよ？　どうするんですか？」
『そうだね。じゃ、一旦切るからまた君から連絡頂戴っ』
どういうことです？　尋ねる前に、切られた……。
ツーツーというＢＧＭが何かとてつもなくムカつく。
取りあえず、言う通りに再び電話をかける。
あっさりとつながって、取りあえずは一安心だ。

「ええと、何で切ったんですか？」
『ん？　理由は簡単さっ。長電するとお金がかかるでしょ！』
「……」
自己中心な理由だった。
聞かなければよかったと後悔した。後悔先に立たず。
「まぁいいです。それで、どうやって行くんですか？」
『ん？　ああその件ね。香織ちゃんはもうお金は払うからタクシーで来いってさ』
アイツは元から自己中心な奴だ。うん。知ってるさ。
それでもやっぱりムカついた。
「分かりました。それじゃあ、旅館の名前を教えてもらえますか？」
『いいよっ！　ええとね、“京都の海”だってさっ』
京都の海……？　代わった名前だな。
まあいいか。
「京都の海ですね。了解です。それじゃあ、また」
『うんっ！　待ってるさ』
通話を切り、携帯をたたむ。
そのまま携帯をセーターのポケットに入れて再び三人分の荷物を背負うと俺はジャストでナイスでグッドなタイミングで来たタクシーを止めて、その旅館に向かった。

とらぶる４．．．理不尽というなの暴力（前書き）

えーと、色々と忙しくて以前書いた小説を推敲する時間がありませんｏｒｚ
前のままとりあえず執筆します＾＾；

とらぶる4・・・理不尽というなの暴力

「なーにやってんのアンター！」
額に手刀。女とはいえ少しは痛い。
「お前が歩くのが早いから悪いんだろ！　大体な、こんな大量の荷物でお前についていくなんて無茶なんだよ！」
「アンタは男でしょ！　弱音を吐くな！」
「男女平等っ！」
「うるさい！」
今度はグーパンチ。しかし、腹に力を込めてガード。これでほとんどダメージは……。
「……！」
鳩尾！？　ば、馬鹿な……。
ガクリと地面に両膝と右手をつける。左手はグッド……いや、バッドポジションに拳が入った場所をさすっている。
「お、お前……みぞは危険なんだぞ……」
「フンッ。アタシに逆らうから悪い。いこうネオン」
俺と大量の荷物を置いていって旅館に入っていく花園とネオンちゃん。

「フフフフフ。楽しそうだね、香織ちゃん」
後方で今の光景を微笑ましい笑顔で眺めている女性が一人いた。
「……理恵さん。止めに入ってくれてもいいじゃないですか……」
「んー？　だって香織ちゃん、楽しそうにしてたでしょ？」
あなたの目は一体どうなっているのですか？　楽しそう？　アレが？　いやいやいやいや。たとえ、地球に太陽ほどの隕石が落ちてくることがありえたとしても、それはありえませんよ理恵さん。
「マジギレだったじゃないですか……」
「ンフフフ。君にはそう見えたってコトでいいじゃないかっ。それ

より早く中に入ろうさっ。外は寒いよっ」
見る者全ての男を一発で落とし兼ねない微笑みを俺に見せて、自分の荷物を持つ理恵さん。多少は俺の負担も減るだろう。ありがたい。
「ありがとうございます」
「いいやっ。礼には及ばないさっ。これは私の荷物だしねっ」
素晴らしい人だ。これほど素晴らしい人はきっと数人といない……いや、これが普通なんだ。花園を基本にしてはいけない。
俺は残りの荷物――花園の荷物とネオンちゃんの、俺を入れてたカバン――を持ち、待ってくれている理恵さんと並んだ。

さて、じゃあ中に入ろうと歩みを進めようとしたとき、理恵さんは俺に話しかけてきた。
「フフフ。これからも香織と遊んでやってくれさっ。彼女にとって、本当の友達は君だけなんだからねっ」
「？　俺より仲良さそうな奴、たくさんいますよ。中には中学からの付き合いって奴もいますし」
「それはあくまで“付き合い”なのさっ」
「？」
あくまで“付き合い”ねぇ。一見、俺より仲は良さそうなのに。……つまり、その“一見”ってやつでしかないってコトか。
でもなぁ、アイツの態度を見ると……。
「香織は、俺のコト嫌いなんじゃないんでしょうかね？」
「……嫌い？」
驚いたように目を丸くする理恵さん。俺は何か変なコトを言っただろうか？　個人的な意見を言ったまでだが。
「可笑しなコトを言うね。君のコトが嫌いなら彼女は君を呼ばないよ」
「うーむ。しかし、アイツの態度見てるとそうとしか思えないですよ」

「彼女なりの気持ちの伝達さ」
絶妙な笑みを見せて俺に言う理恵さん。
いつもなら見とれるところだが……アイツのなりの気持ちの伝達か。何の気持ち？
「怒りの伝達ですか？」
「どう捉えるかは君の自由だよ、むーちゃん。長話になってしまったね。香織ちゃんに怒られちゃうよっ。早く中に入ろうさっ」
話を強引に終わらせる理恵さん。俺はまだ納得出来なかったが、その疑問よりも寒さが勝ったため、俺は理恵さんと結局旅館に入った。

♪　♪　♪

「おおー。広いなー」
理恵さんに案内されて俺は部屋に着いた。
壁には掛け軸などがかかっている。部屋の中央には大きめのテーブル。上にはお試し用のお茶っ葉と試食用の八つ橋や飴。
部屋は今は一部屋のようになっているが、四枚ほどの襖で分けられていた。取りあえず、寝るときには困らなさそうだ。分けても畳十枚はある。俺一人でこの広い部屋で寝るのはどうかと思うが、それでも女性と寝るよりはマシだろう。
「ボケッとしてる暇はないわよ。早速銭湯に行くんだから」
満面の笑みを浮かべて楽しそうに花園は言った。
「銭湯。へぇ、よさそうだな。俺も……ん？」
俺は下に綺麗に並べてある荷物を見る。四つのカバンが置かれていた。ええと、これは花園の。これはネオンちゃんの。これは理恵さんの。そしてこれは俺を入れていて何も入っていない。
……。
服ねぇじゃん。

「俺の荷物は？」
「ん？　知らないわよ。自分の荷物は自分でちゃんと準備するものでしょうが」
「ふざけるなよ！　俺はお前に連れてこられたんだろうが！　準備もクソもあるか！」
「さぁネオンちゃん行きましょう。早く温まりたいわ。理恵姉ちゃんもいこ」
軽くスルー。
俺の怒りのボルテージは上昇。
「もう俺は帰る！　どれだけ金がかかろうとタクシーで帰ってやる！」
そう、俺が叫び終わる頃には女性陣は全員部屋を出ていた。
ポツリと部屋に一人で残される。
なんか、もう疲れた。

♪　♪　♪

結局、俺は旅館の中をうろちょろするコトにした。帰るにもお金も持ってなかったし。携帯の電池も切れ、電子マネーすら使えない最悪の状況だ。
そう言えば、時空の奴『四日間ほど』って言ってたような……。それは……流石に困る。
ック。一度頭を冷やそう。今は怒りで可笑しくなってる。
そういうわけで俺は外に出た。しかし、それは失策だった。冬の夜。ちらちらと雪も降ってる。
「おぉおぉおぉぅう」
寒い。クソ。地球温暖化とか言ってるけど対した問題じゃないんじゃねぇか？　こんなに寒いんだし、もっと暑くなっても全然大丈夫だと思うな。
俺は一瞬中に入ろうと思ったが、すぐに止めた。特に理由はない。

どうしても答えろと言うなら、男に二言はない、というやつさ。文句ないだろう？
取りあえず、旅館の周囲を一周するようにして俺は歩みを進めた。まぁ、散歩ってやつだ。
特にこれといって挙げるようなものはない。芝生と木があるだけ。途中でコンクリに変わったけど。
まぁ、それでもよかった。元々、何の意味もない暇潰しのための散歩だしね。
何の期待もせずに、取り分け何も考えないで歩いていた。点々と光っている部屋を見ながら、俺達の部屋はどれかなー、なんてくだらないコトを考えていた。
昔、ある友人が言っていた。『たまに、なーんにも難しいコトを考えないで歩いてごらん。そうすると、悪いことや悪い感情を全部忘れられるよ』とね。
今ならまぁ、分かる気がするかな。
そう、穏やかな気持ちになりながら旅館のまわりを歩いていた。中学生時代の、変わった友人を思い出しながら。

「――――ん？」

映画のワンシーンの様だった。
一人の少女が、旅館の壁に持たれて泣きながら体育座りで座っていた。
どこかの学校の制服。その上にブレザーを羽織っている。髪は青いリボンで束ね、ポニーテールにしていた。
地元の高校生だろうか？　うーん、中学生に見えなくもないし……。
どちらにせよ、ほっとけないな。別に、変な意味とかじゃなくて純粋に。
「どうしたの？」

ありきたりな台詞で話しかけてみる。ひょい、と少女が俺を見上げた。

――――――！

クリティカルヒット！

ネオンちゃん以来の当たりの子だぜっ！

嗚呼、神よ、努力は報われるのですね。素晴らしき人生。七星よ、これが君の言う『通過点』か。いいじゃないか。

「……」

まずいな、こちらの様子を窺っているようだ。

失敗したな。まずは俺が安全で善良な青年ということを明確にしなければ。紳士の俺が、何たる失態。

「ほら、飴あげるからさ。取りあえず、名前ぐらいは教えてくれないかな？」

「……」

おや？　何か滅茶苦茶怪しまれている気がするぞ。何だい、その露骨に嫌な顔は。いや待ってくれ、俺は変態じゃない。そこら辺にいる誘拐犯でもないぞ。

どうしようかな……。まずは、警戒心を解いてもらわないと。

「……じゃあ、これから俺は独り言をするからさ……。暇なら聞いてくれてもいいし、素直に気持ち悪いと思ったらどこかへ行ってくれてもいい」

俺は一メートルほど少女と距離をとって地面に座り込んだ。

今のところ、少女は立ち去る気配はない。……それじゃあ、少し独り言を言わせてもらおうか。

「俺の住んでるとこはさ、家賃一万円の四畳一間のアパートなんだ。一つ言っておくけど、決して貧乏という訳じゃないぞ。俺は遊びも勉強も大切にしていてね、出来うる限り、お金は使わないようにし

ている。遊ぶときに使うお金をちょこちょこと貯めている訳さ。まぁ、そういう訳でそのオンボロアパートに住んでるんだけどさ、これが今の時期とっても寒いのよ。凍死するんじゃないかって思うぐらい。だから俺はある友人の家で勉強することになった。寒いと勉強に集中出来ないからね。それでさ、いざ友人の家へ向かおうとしたときに俺の部屋のドアがノックされたんだ。それで、俺は少しの間待っていた。ある女……まぁ友人にドSの奴がいてね。ノックして五秒以内に開けないとヒャクレツケンの勢いでノックの嵐をしてくる奴なんだよ。そいつかどうか調べるためにやった訳なんだけど……五秒経ってもその嵐はこなかった。俺は安心してドアを開けようとしたんだけど、何かさ、そこで気絶させられちゃってさ。起きたらビックリ箱の中。両手両足をガムテープで縛られていてね。開けろーと言いたくても口にもガムテープが張られていてさ。もう散々だったよ。犯人はグルでさ。ドSの奴とその勉強を一緒にしようと言った奴だったんだぜ。泣けるだろ」

少女は、動かない。聞いているのかは分からないが、立ち去ろうとしていないのは事実だ。まだもう少し、話をさせてもらおうかな。

「そんでさ、その箱に入れられているとき、どうやら新幹線に乗っていたようでね。『俺の料金どうしたんだよ！？』とかいうツッコミすら入れること出来ない訳だろ？　もう物凄く辛くてね。無賃乗車している罪で俺の胸は張り裂けそうだったよ。後で犯人にちゃんと払わせなきゃ俺はもう一生生きていけないと思いながらも、身動きがとれないから仕様がない。結局、その新幹線から代金払わずに下りてね、もう死のうと思ったけどそれじゃあ両親に申し訳ない。だからここは我慢だと俺は堪えた訳だ。そうして駅から約二時間。俺は箱の中で過ごした訳だが……これがもう凄くてね。何かのアトラクションよりキツかった。階段やら何やらでがたがたがったがた揺れるんだよ。壮絶な吐き気と戦いながら俺はようやく解放された

訳だが……なんとまた縛られたくなかったら荷物を運べだとさ。もうその女は恐ろしくてね、一度怒り出すと釘バットを振り回してさ、そうしたらもう従うしかない訳だよ。渋々荷物を運んでさ。見失わないように一生懸命に追いかけてた訳なんだけど、ソイツはわざと走っていく訳よ。俺を嘲笑いながら疾走していくんだぜ。結局見失ってね。どうしようかと思ってたら親切な方が俺に連絡をくれた訳だ。そうして何とかここについた俺に、ソイツは『トロいのよこの豚野郎。豚より使えないじゃない』とか言ってくる訳だよ。酷い話だろう？　連れていってって言ってもないのに。人をガムテ拉致した上に奴隷扱いだ。いや、挙句の果てには豚以下とまで言ってくるんだから――――」

俺はもうそれ以上話さなかった。この後、まだまだ話そうと思ってはいたけどね。

少女はクスクスと笑っていた。

俺は、何故か安堵を覚え、小さく笑った。うん。安堵を覚えた理由なら、多分、ようやく少女が笑ってくれたから。

俺はよっこらせと立ち上がり、笑っている少女の方を見た。

「さて――――、これぐらいで独り言はお終いにしようか。取りあえず言っておくけどさ、俺は誘拐犯とかじゃないよ。君が一人で泣いていたからさ、ちょっと気になって話しかけただけだ」

だけ、じゃないんだろうけどね。まったく、何か、ネオンちゃんの時といい泣いている娘はどうしても放っておけないな。

勘違いされたら困るから言っておくけど、俺はロリコンじゃないぞ。断じて違う。大体、コンプレックスの意味が違ってきているのは何でなのさ。劣等感という意味なのにさ。

「姫菜です」

「――――え？　ごめん。考え事をしていてね。よく聞こえなかった」

「だから、名前です。名前は姫菜です。姫ちゃんと呼んで欲しいです」
「姫菜ちゃん……姫ちゃんね。オッケー。一生覚えておくよ」
姫ちゃんは笑った。俺もそれに笑顔を返す。

「さて……姫ちゃん。その様子だとまだ家には帰ってないみたいだね。早くお家に帰らないと、ご両親が心配するぞ」
「あ……いえ……大丈夫です。一旦、家には帰ったですから」
……そう言えばカバンを持ってないな。なるほど、帰ったというのも納得できる。
まぁ、今の時間は六時ちょっと過ぎたところだし。大丈夫かな。
「ふーん。まぁ、それでも早く帰るんだよ。一人でこんなところにいたら危ないしね……ってここは旅館の敷地内だから大丈夫かな。家は遠いの？　なんなら送ろうか？」
「あ、いえ……」
顔を俺から背け、ちょっと声をくぐもらせる姫ちゃん。
「姫ちゃんのお家は、あれです」
ひょい、とどこかに指を向ける姫ちゃん。その延長線上へと俺も視線をやる。
そこには、旅館のすぐ側にある家。確か、旅館の持ち主の家じゃなかったっけ……。ってか、旅館の敷地内にあるんだからそなんだろうけど。
持ち主の家。持ち主……。
「持ち主！？」
「ひぇっ！」
「――――ああ、ごめん。いや、予想外の返答にちょっとビックリしちゃってね」
俺の驚きの声にビックリする姫ちゃんに謝る。
「いえいえ。全然ですよ」
それに対して姫ちゃんは首と手を高速で振る。嗚呼、可愛いなぁ。

無口なネオンちゃんとはまたタイプが違う可愛さだー。ポニーテールがまた似合って。

うーん。まず、『～です』でプラス一。一人称が姫ちゃんという点でプラス一。性格面でプラス一。ポニーテールでプラス一。驚き方でプラス一。フェイスでプラス五。おお、十点満点。

「どうしたですか？　にやにやしてるですが」

「――――ん？　いやいや。にやにやなんてとんでもない。笑ってただけだよ。さて、じゃあ、帰ろうか。送っていくよ。まぁ、ほとんど距離はないけど」

「ありがとうございますですー」

はにかむように微笑んで、姫ちゃんはお礼を言ってくれた。言ってくれた。もう一度言わせてくれ。言ってくれた。

うわー。天に昇るような……そんな感じ。……再度言うが俺はロリコンじゃない。年下に劣等感なんてない。

いや、年下は好きだけど。ていうか年上同級生年下オールオッケーだけど。

あくまでロリコンではないということを主張しているのであって、誰も年下が嫌いなんて言ってないぜ。

「それと、姫ちゃんって何才？」

「姫ちゃんですか？　今は十七です。どうしてですか？」

「ん？　いや。何でもないよ」

……。

ギリギリクリア。危ねぇ。十六才だったらアウトだったぜ。

俺は自分で制限をかけている。今は十九才だから……二十一才から十七才までだ。ようするに、二才差まで。

まぁ、短い間だけだから聞いても無意味だけどね。

徒歩で一分もかからずに姫ちゃんの家に到着。その間の会話は先ほどの会話のみだった。
姫ちゃんは『ただいまですー』と言ってドアを開ける。
瞬間、絶句した。
「お帰り、姫菜。――――で、その人は誰？」
「んー？　この人は落ち込んでいた姫ちゃんを慰めてくれた優しいお兄ちゃんですよ」
誰？　このかっこいい兄ちゃんは。やべぇ。コンプレックスだぜっ。畜生。神様は平等じゃねぇ。俺もこの人ぐらい格好良く生まれたかった。
二人の視線が俺に注目しているのに気づく。
ええと、名前？
「あ、どうも。青空です」
あ、反射的にいつも呼ばれてる名字を答えてしまった。ま、いっか。
「青空君か。姫菜がお世話になったね。ありがとう」
「あ、いえ。いつでもお世話になってくれても結構ですよ」
そうかい、と格好いいお兄さんは笑う。畜生、笑い方まで格好いいぜ。……待て。俺、全部負けてね？　オールコンプレックスみたいな？　それってまずくね？
「ハハハ。それはありがたいな。僕の妹はいつも暇そうにしてるからね。旅館に泊まっているのだろう？　なら泊まってくれている間、仲良くしてやってくれ」
白い歯を見せて笑った。……俳優にも負けない笑みだった。まぶしすぎる笑みだった。
……うん？
待てよ……。
「いもうと？　あの、お兄さんですか？」

「ええ。姫菜の兄の輝です」
「――――そうですか！　そうなんですか！　いや、素晴らしいお兄さんだね姫ちゃん。うん。俺もこんないいお兄ちゃん欲しかったよ。とてもキツい姉より輝さんみたいな兄が欲しかったよ」
俺の目に光――希望と読む――が戻った。
そうか、お兄ちゃんなのか。そうかそうか。そうなんだね。うん。彼氏なんかじゃなかったのか。
ははは。焦るじゃないか姫ちゃん。まだ手遅れじゃないんじゃないか。
なんか、今回の旅行が楽しくなってきたぞ。うん。これも全部君のおかげだ、姫ちゃん。
「それじゃあ、そろそろ飯食べるんで」
俺は軽く頭を下げて別れの挨拶をした。
輝さんはそうかい、と言って微笑んだ。いや、格好いいぜマジで。俺が女だったら一発で惚れてるね。
「ばいばいですー」
ひょこひょこと手を振る姫ちゃん。俺も満面の笑顔で手を振り返した。

神の存在を初めて信じた瞬間だった。

とらぶる5・・・ 用件は先に言え

姫ちゃんと輝さんと別れて、外は雪が本格的に降り始めた。しんしんと積もっていく雪。はぁ、銭湯に入っている花園達が羨ましいなぁ。

俺はその雪から逃げるようにして旅館の入り口へと向かった。気温は既に氷点下だろう。

はぁ、と両手に吐息をかけて素早く擦る。しかし、筋肉の疲労が来て途中で終わる。まぁ、多少は温まったからいっか。

芝生がようやく見えてきて、俺は最後のコーナーを曲がった。その先には暖房が聞いている旅館内へと続く天国への扉がある。

「寒い寒い」

さて入ろう。そう、ドアを開けたとき――――

「あ、いた。もーどこ行ってたのよアンタ。探したんだからね。鍵持ってんのアンタなんだからアタシ達部屋に戻れなかったのよ。折角銭湯でいい思いしてきたのに台無しじゃない」

ダーッと止まることなく一気に語るべきコトを語る奴と出会った。偶然に。いや、七星がいうようにこれも必然……。

それはいいとして、確かにそれはそうである。なら俺を最後にするなと言ってもいいが、理恵さんとネオンちゃんにも迷惑をかけてしまっているようだし。

「悪い悪い。今行くよ」

「え？　あぁぁぁ。うん。早くしなさい」

文句を言うとでも思っていたのだろう。花園が拍子抜けた顔をする。

俺は滅多に見られないような花園の顔に苦笑しながら旅館に入った。

♪
♪
♪

「すいません。今開けるんで」
軽く頭を理恵さんとネオンちゃんに頭を下げて、素早く懐から鍵を取り出しドアを開ける。ロックの解ける音がして俺はドアノブに手をかける。
「よし。それじゃあ行くわよ」
「は？」
俺の腕を素早く掴むと言うよりも早く花園は歩き始めた。理恵さんはバイバーイと笑顔で手を振り、ネオンちゃんはいつもの無表情。
ま、待てって。

そうして、引きずられるようにして俺は歩みを進めた。
「待て待て。まずはどこへ行くか話せ。そうして放せ」
言っておくが……花園は言うまでもなく女性であり、俺は言うまでもなく男である。純粋な力の関係は花園＜俺だ。
エレベーターの前辺りで俺は花園を強引に止める。それでもやっぱり引っぱろうとする力は緩まなかったが、取り敢えずは止まった。
はたして、花園は俺を不満いっぱいの表情で見つめるのであった。
「いいじゃないの。どうせ暇なんだから」
「はぐらかすな。どこへ行くんだ。言わないと俺はここから一歩も動かないぞ」
一瞬、花園はたじろいだように見えたが、それでもまた一瞬で復活。俺と花園の視線が交差する。今にもバチバチと音を上げそうな勢いだ。
睨み合いが続く。結果、先に口を開いたのは花園だ。
「さっさと来るの！　アンタはアタシの言う通りにしておけばいいじゃないの！」
お前は子供か。

もしくは女王さまか。
いや、お前の場合姫様か。
「いやだ。……いいか花園。一応、俺は行かないとは言っていない。ただどこへ行くか教えろと言っているだけなんだ」
いやだ、の部分にスタッカートをつけて言った。
イジケたように顔を歪ませる花園に俺は続ける。
「大体な、香織。お前はいつもいきなりすぎなんだよ。俺はお前が行くって言った場所ならちゃんと行くし、約束も出来うる限り守る。いつか言ってた四次元空間だろうと一緒にいくさ。だけどさ、まずはちゃんと行く場所を教えてもらわないと俺は困るんだよ。今日だってそうだ。ついてこいって言ったら俺はついていったのに。おかげで俺は服も何もない」
お前が俺の来ているセーターに入れていた携帯以外はな、と付け足す。
そうして、俺は諭すようにしてこう言った。
「だからさ、ちゃんとどこに行くか教えてくれ。俺はちゃんとついていくし、厄介事にも突っ込んでいくからさ」
「……」

口を尖らせて俯く花園。俺は構わず花園を見つめる。
そうしていたら、花園は俺から手を急に放しふいっと後ろを向いた。そうしてエレベーターのスイッチを押した。
「・・・に行くのよ」
非常に小さな声で呟くようにして言った。俺は聞き取れず、「何？」と聞き返す。
だーかーらー、と今度は大きな声で、
「デパートにアンタの服買いにいくのっ！」
と叫ぶようにして言った。
俺は苦笑を浮かべて、
「あいよ。ほんじゃま行きましょうか」

と言った。
それなら喜んで行ったのによ。無駄な時間とっちゃったじゃんか。
思ったけど、口には出さなかった。

とらぶる6・・・天国と地獄

生き返るとは実に的を射ていると思う。
氷点下二度の極寒の中、どこにあるかも分からないデパートを探し回り、ようやく見つけたと思ったら花園が『気に入らない』と言いだし再び外へ出て……。
面倒くさいので以下省略。
まぁ、そんな訳で、なんとか着替えが手に入った。花園がお金を“貸してくれた”のでね。
奢ってくれるのかと期待していたのだが、『何甘えてんの？』と結局そうなった。まぁ、花園らしいといえば花園らしい。せめてもの意地ってやつだろう。
しかし、帰ったら当分の間時空の家に隠れておかねばならない。でないと、俺の二月分の食費に羽が……。
おぉぉう。考えただけでぞっとするぜ。銭湯にいんのに背筋が寒いのは何故？
とやかく、今俺は銭湯にいる。天然の冷凍庫に入っていた俺の体は最初、悲鳴を上げたが今ではすっかり……。
いや、もう出るけどね。頭に血が上ってクラクラする。

♪　♪　♪

ゆっくりと鼻血が出るまで温まり、鼻にティッシュをつめて部屋に戻った。
今頃、きっと温かいご飯が俺を待ち受けてくれている。
京都の料理。どんな食べ物か知らないけど、きっと美味しいんだろうな……。考えただけでよだれが出てくる。
部屋の扉が見えてきた。俺は少し速歩きになり、先を急いだ。
扉のノブに手をかける。そうして、惜しむようにして俺は扉を開

けた――――

そこには、美味しそうな白いご飯・お味噌汁・天ぷら・お刺身・豆腐・茶碗蒸しが。

なかった。

あれ？　おかしいな。さっき俺の目に映った料理は？　幻覚かな？

「ねぇ。俺のご飯は？」

「もうないわよ。決まった時間に食べないから旅館の人が持ってったわ。だから言ったでしょ。風呂の前にご飯食べといた方がいいって。アンタの分はアタシ達で分けて食べちゃったわよ」

待てよ。お前、風呂前に食った方がいいとは言ったが、時間が決まっているとは言ってなかったろ。

ていうか何ニヤけてんだよ。テメェ、明らかに知っててやったって顔じゃねぇかよ。ハメたんだろうが貴様が。

「美味しかったー。ねぇ、ネオン」

コクリ。頷くネオンちゃん。

もう悲しくもなんともないさ。君は俺の敵だろ？　そうだろ。そうなんだろ。

あなたもです理恵さん。先程はあんなこと言ってましたが、口実でしょ？　いや、花園が楽しいんじゃなく惨めな俺を見るのが楽しいんでしょ？

美女三人と旅行。そう言えば聞こえはいい。

しかし、極度のＳ美女三人と旅行。こう言えば微妙だろ？

言っておくが、俺がＭなんじゃない。彼女らが“極度の”Ｓなんだ。

つくづく思う。

道徳って、大切だよね。

「さて、明日も早いし、もう寝ましょう」

満面の笑みで言うな。満面の笑みで言うな！　そんなおもしろそ

うな目で俺を見るな！！
まぁいいさ。それよりも。
「真面目の俺の飯、ないの？」
「うん」
零・零零二秒の回答。いや、当たり前だがこれは適当に言った。
だけど、これぐらいだと思うよ。
こんな会話をしているうちにどんどん布団が敷かれていく。無論、三枚のみ。

三人の美女。
満面の笑み。
一人の青年。
傷ついた心。
三枚の布団。
美味しい飯。
……。

俺はポジティブだから三人の美女しか見えないなぁ。嗚呼、浴衣のネオンちゃんも可愛いなぁ。
……。
止めた。悲しくなってきた。
いいさいいさ。味方もお金もなくたって、俺にはまだ人生があるんだからさ。
あと三日もすりゃ普段の生活へUターンだ。リターンだ。
……お腹空いた。俺も寝よう。
そう、思ったところでピシャリと障子の戸が閉まった。布団は花園達が寝ている部屋の押入れにしかない。
決定。
この旅行、厄介になりそうだ。

とらぶる7・・・ 飲酒は二十歳になってから

「やぁやぁむーちゃん。さっそくもうお疲れのようだね」
あれから、女性陣の部屋にどうやっても入れず、寝るのを諦めた俺は銭湯の入り口あたりにある憩いの場でタダだった水を飲みながら月を眺めていた。月だったことに特に理由はない。
ありがたいことに、この旅館は二十四時間銭湯に入ることができ、無論、銭湯前のこの憩いの場も二十四時間開放されているのだった。
そうして、俺が今日一日をここで過ごそうと思い水を飲んでいると、何故かビールを飲んでいる理恵さんがやってきた。
「ええ。そうとう疲れてます。特に精神が」
「うーむ。いいことだ」
全然よくねぇよ。
「まぁ、そんなことは私にとってはどうでもいいのさっ」
そんなこと……。
天使の笑顔に悪魔の言葉。っく、ここまでくると清々しすぎる。
理恵さんはそう言って、俺の隣に座った。
まぁいいや。とりあえず、思っていることを尋ねることとしよう。
「じゃあ、どんなことが大切なんですか？」
「んー。なんなんだろうね？　君のことは私と全く関係ないし、例え君がこの世に疲れて服を全部脱いで凍死しても私には何の影響もないからね」
「……」
この人、あんまり過ぎないか？　いくらなんでもそれはひどい。
あまりにもショックを受けたという顔だったのか、理恵さんは苦笑した。
「冗談だよ。大体、君が人生に疲れたなんていう理由で自殺するわけないしねっ。もしあったとしてもとても悲しむさ」
「それを聞いて安心しましたよ」

いや、真面目にだよ？　君、死んで美人な女性に悲しまれるのと悲しまれないのでは、天と地の違いがあるぞ。
「さて。じゃあ本題に入ろうか」
「本題って……どうでもいいんじゃないんですか？」
「冗談といったじゃない。むーちゃんは人の話ももっと聞くように」
酔っているのか、少し顔が赤い。しかし、浴衣姿でちょっと色っぽい。自然と、俺の視線はその白い首元に……。
「むーちゃん。今注意したばっかりだよ。人の話はちゃんと聞きなさいっ」
「……ハイ」
拗ねたように言う理恵さん。……いい。
オイ！　何緊張してんだよ俺！

「よろし。んー、じゃ本題なんだけどー。君は今日、香織がむーちゃんのこと嫌いなんじゃないかと言っていたよね？」
「？　はい。いいましたが……何か？」
ここで、理恵さんは缶ビールをグイッと飲んだ。ＣＭのお姉さんに負けない飲みっぷりだ。
最後の一滴まで飲み尽くすと、理恵さんは相変わらずの笑顔で、顔を赤くしながら俺に尋ねた。
「君はどうなのさ、むーちゃん。君は香織のことをどう思ってるのさ？」
「どうって……」
そんなの。
「決まってるじゃないですか。友達ですよ」
「本当にそう思っているのかな？　君は香織に散々な目に何度もあわされている。私もよく見てたからね、分かるよ」
うんうんと頷く理恵さん。
「そんな香織を、君は、嫌いと思っているんじゃないのかい？」
「……」

理恵さんは、笑ってはいるが恐らく真剣だろう。空気が、一気に変わった気がする。
俺は、少し間を開けて答えた。
「俺は嫌いな奴とはつるみませんよ」
アイツが俺をどう思っているかはわかりませんけど、と付け足した。
理恵さんは笑みを浮かべたまま、そうだよねーと言って、やっぱり頷いた。
「ま、私にとって、こんなことどうでもいいんだけどねー」
いいつつ、近くの販売機で缶ビールを二本購入する理恵さん。二本も飲むのか……。
と、思っていると。ずいぃっと俺の目の前に缶ビールが差し出された。
俺は脳がついていかず、顔を上げる。そこにあるのは、酔って赤くなった色っぽい理恵さんの顔。
「まぁ、飲みなー」
「あ、あの。俺まだ未成年です」
「そんなの、全くこれっぽっちもぜんぜーん関係ねぇ」
オイ。二〇〇七年の人気芸能人のネタパクるな。
っていうか滅茶苦茶関係ある！　アンタ飲ませたら犯罪者だよ！？　俺は理恵さんにここにいてほしいって！
「いいんだよぉ。バレなきゃ。世の中、バレなきゃなんでもやっていい世の中なのさ」
はっちゃけたよ。
ていうか日本の将来大丈夫かよ。ホント不安になったぞ今。
いや、まぁ間違ってはない気がするが。
隣でグビグビと缶ビールを飲む理恵さん。その様子を見ていると、物凄くおいしそうである。

「じゃあ、いただきます」
俺も、缶ビールを開ける。
そうして、一口。一気に麦色の液体を胃へ流し込む！　そうして、俺の感想は……。
「苦っ！　いや苦っ！　ってかマズっ！」
「ふっふっふ。若いねー、むーちゃん。ビールがまずいって感じるなんてまだまだ子供だなー」
子供かは分かんないけど、俺はまだ一応未成年だよ。
「まぁ、私は一応満足した。これで部屋に戻るとするよ」
隣で座ってビールを飲んでた理恵さんが立つ。俺はビールをどう処理しようか悩む。
理恵さんはそうしてそれと、と言葉を繋げた。
「一応、君布団を敷いといてあげたから。それを飲んだら寝なさいねー。それじゃ、お休みー」
手をヒラヒラと振って部屋へと戻っていく理恵さん。
一瞬、俺は理恵さんが神――中でも女神という種――に見えた。
ありがとう理恵さん。俺はあなたに救われた。

理恵さんが、去り、なんとかビールを処理して俺は寝ようと部屋に戻った。布団は理恵さんが敷いてくれている。
俺は起こしてはまずいと、そーっと戸を開けた。
「……」
俺の部屋で、気持ち良さそうに寝息を立てて理恵さんが寝ていた。
結局、理恵さんは俺の女神でも何でもなかった。

とらぶる8・・・お買い物へ逝こう

花園　香織。性別、女。性格、短気。
黒絹のように綺麗な髪を面倒くさそうにハサミで切ってほったらかしている。それは丁度耳を隠すぐらいのショートカットになっており、これがまた変に似合っているんだよなぁ。
冬という季節故、厚着をしている。どこにでも売ってるようなロゴ入りの長袖になんというか……探偵が切るような茶色いコート。

三日月　音々。性別、女。性格、無口。ってかこれ性格なのか？
ネオンちゃんも香織と同じくショートカットだが、こっちの方は綺麗に切りそろえてあり、これまた変に似合っていた。
ネオンちゃんは控えめ（？）で、真っ白な長袖の上に真っ白で地味なダッフルコートをまとい、そうしてフードをかぶっていた。
……可愛いのに。もうちょっとおしゃれに目覚めてほしいものだ。
まぁ、前よりはマシになったが……。以前は真っ黒だったもんな。

花園　理恵。性別、女。性格、陽気。もしくはのんき。もしくは能天気。……さりげなく酷い性格ばかりだな……。
こちらは腰辺りまで伸ばしている長い髪をお持ちである。見た目は凄く律儀な人って感じで、その感じがお姉さんという感じを引き出してるというような……。
眼鏡が似合いそう。……さぁ、次に服装の説明にいこうか。
可愛らしいうさぎがプリントされているTシャツに赤い革ジャン。一見、とてもラフな格好だ。しかし、それが慣れているためか、よく似合っていると思う。

海　姫菜。性別、女。性格、素直。……多分。
長い髪を青いリボンでポニーテールにしている。うむ。やっぱり

可愛い。
そして、その可愛さに比例するように服装もいけている。真っ白なフェイクファーコートを着ており、いやぁ、もこもことして可愛らしい。

そして俺。性別、男。性格、不明。正直、自分で自分のコト勇敢とか穏やかとかなんかかっこいいことといってたりしたらナルシストっぽから不明で。
容姿はどうでもいいだろ。男の服装なんて聞いても喜びそうもねぇし。まぁ、俺が超がつくほどのスターだったら聞く価値はあるかもしれないけど。

「なーにジッと見てんのよ。しかもそんなまるで死んだ魚みたいな目で見ないでよね。気持ち悪い」
死んだ魚の目。
それはあんまりだろう。
一睡もしなかったんだから……。
「いやぁ、悪いねぇむーちゃん。酔っちゃってさ、むーちゃんのコト“忘れて”ついうっかりむーちゃんの布団で寝ちゃったんだよ」
忘れて……。

あんたら、俺のコトをなんだと思っているんだ！？　そこら辺に落ちてる石っころ程度にしか思ってねぇんだろ！
「うわー。美人な人ばっかりですねー。お空の兄ちゃん、はたから見たらとても羨ましがられると思いますよー」
目をキラキラと光らせて言う姫菜ちゃん。
ッハ。確かにはたから見りゃ羨ましいだろうよ。だが、俺は学んだ。美人＝優しい人という式は間違いだと。可愛い娘とつるむの＝幸せというのは間違いだと！
適当に大学いって適当に就職して適当に結婚してそれなりに幸せ

な家庭を築けたらいいなぁ、と俺はそんな高望みしなかった。それなのに……。
人生は皆平等って聞いたことあるけど、嘘だよ、それ。
「どうしたんですか？　そんな疲れた顔して。これからが楽しいショッピングなんですよ？」
「姫ちゃん。君は彼女らのショッピングを知らないからそんなことが言えるのさ。楽しい？　それは違う。地獄だよ」

そう。あれから一夜明けて俺達は京都でショッピングをすることになった。どうやら、すでにプログラムは組まれているらしい。
今日はショッピング。
明日は観光。
明後日は遊園地で思い切り遊ぶ。
……全部、疲れるものばかりだ……。
特に最終日。ジェットコースター、バンジージャンプ……兎に角、精神的にくるものばかりに乗せられるに違いない。

「本当にいいんですか？　妹も連れていってもらって……」
輝さんが申し訳なさそうに尋ねる。今日、輝さんは少し用事があり、家にいならしい。
ご家族の方も全員用事で、家には必然的に姫菜ちゃん一人になってしまうということだった。
俺が昨日……いや今日、ロビーをうろうろとしていたらたまたま輝さんと出会い、その話を聞いてそれなら一緒にどうですかと誘って今に至る。
「無論です。人数は多い方が楽しいですし。ね、理恵姉ちゃん、ネオン」
「そうさっ。人数は多い方がいいよ」
「……うん」
尋ねる花園。それに二人は同意する。

「誘ってくれてありがとうございます、お空のお兄ちゃん」
明るい笑顔が俺を照らす。感謝の言葉に心が揺れる。
ああ。これが優しさ。
「こいつにお礼は言わないでね、姫ちゃん。すぐに調子にのるから」
「分かりましたー」
納得するな。
「ありがとうございます。本を立ち読みして泣いてしまうような妹ですが、よろしくお願いします」
買えよ。

「あー、あるある。ホントに感動するした本って立ち読みしながら泣いちゃうよね。私もしたことあるさっ」
「ですよねー。“スイッチを押すとき”なんて姫ちゃん、もう号泣しちゃいましたよ。本を濡らしちゃって大変でした」
だから買えって。
そうして、本屋の立ち読みで話が盛り上がっている途中で花園が言った。
「そろそろ行かなくちゃ。最初に行くとこ、後十分で開店しちゃう」
輝さんが薄い笑みを浮かべて、皆にそろそろ行くように促した。
「開店まであと十分だそうですよ。早くいかないと」
「輝さんの言う通りさっ。早く行こうよ」
理恵さんが満面の笑みを浮かべて皆を誘う。
それでようやく皆は歩みを進めた。だけど、俺は足を止めたままだった。
俺は輝さんを見つめる。
「どうかしたの？　皆行っちゃうよ？」
「いえ……。輝さん、寂しそうにしてたので。……一緒に行きたいのかなぁって。それだけです。それじゃあ」
まぁ、一緒に行きたいと思うだろうな。はたから見れば。

輝さんに軽く頭を下げ、俺は駆け足で花園達を追いかけた。

とらぶる9・・・ネオンちゃんとの会話

買い物のために京都の町に出て早四時間。そろそろ俺の腹のリミッターが限界を越える頃だった。既に胃袋メーター（もちろん胃袋の中身の事だ）は〇を指している。

ウルトラマンだったら三分越えて点滅が停止しているような状態だ。いや、ごめんそれ嘘。だって点滅止まったらウルトラマン死んじゃうもん。

ああ、幼き日が懐かしい。

さておき、俺は両手にありったけの荷物（俺の物は何一つなし。全て女性陣の物）を持ち、とても疲れていたので別行動をとってもらうことになっていた。

木を中心に円形のベンチが丁度あり、俺とネオンちゃんはそこに腰かけていた。

真っ青だった俺の腕はすぐに赤みを取り戻し、とりあえず切断は免れそうだった。いや、真剣な話をしていて、荷物ぐらいもってやっても大丈夫と思ったことをすぐに後悔したのはもう言うまでもないよね。

「うなー」

「何ですか？　その気味の悪い鳴き声は。ウケを狙っているつもりですか？　私はそういうではあまり笑いませんよ。そんなんでウケるようなら芸人は苦労しません」

全くだ。

全く何だけど……。

「うぐ。ネオンちゃん。何で俺にはそう容赦ない言葉をかけてくるかな。大体さ、普段もそれぐらい喋ってよって思うの俺だけかな？　きっと香織とかもそう思ってるよ」

「さりげなくさっきの奇妙な鳴き声についてはごまかしましたね」

「ぐぅっ」
いいじゃないか。言ってみたくなっただけだよ。ある小説の両手をなくした少女の台詞を真似したくなっただけだよ。可愛らしいなって思ったから真似しただけだよっ。
何か問題があるというのか？　たまには君にだってそういったことがあるはずだろうネオンちゃんよ。

「……まぁ、いいです。どうせ適当なことを言ってまたはぐらかすだけでしょうし」
「……。君は一体俺をどんな人間として捉えているか不安で仕様がないよ。あ、もし極度のマゾ野郎とか思ってたりしたら俺結構凹むぜ」
「違うの？」
うん。違うの。
可愛らしい質問に合わせて、可愛らしく答えてみよう。
「って。やっぱり君の目にはそう映っているわけね。まぁ、それも仕様がないだろうけど。いいかいネオンちゃん。俺はMじゃなくてね、ノーマルだ。決してSでもMでもない。“N”だよ」
“N”の部分を強調して言ってみる。ああ、そうさ。俺の発言は正しい。俺はSでもMでもない。Nだ。そう、ノーマルさ。ノーマル以外の何者でもないはずだ。ああ、はずだとも。

「……それにしても遅いな、アイツ等。ってかネオンたん…ちゃんはいいの？」
史上最悪のかみ。
うわぁ、止めて止めてその視線。かんだ後にちゃんとちゃんに訂正したじゃん。俺はそっち系じゃないよ。オタクじゃないよー！
ネオンちゃんは相変わらず冷たい視線を送ってくる。待ってくれ。俺という人間の概念にオタクを付け加えるのはまだ早い。フィギュアなんてもちろん集めてないし、アニメなんて見ないんだ。

いや、ジャンプ系は見たりするけど……。
それでも変なの見てないよっ。断言するよっ。
やがて視線に氷エネルギーを込めるのに疲れたらしい。はぁ、とため息をついていつものクールフェイスに戻った。
俺も、状態以上緊張からノーマルに戻った。

「私はいいです。あまりこういったことには興味がありませんから」
「……そう。まぁ、無理に買い物しろとは言わないよ。お金もネオンちゃんの物だし」
ちなみに、俺の残金は携帯の電子マネーのみ。さらに言うと充電が切れててその電子マネーも使えない。まぁ、ようするに一文無しだ。
「大体、それ以上荷物を増やしたいんですか？」
「いや、それはマジでゴメン」
だって、多分もう持っている分で軽く五キロは超えてる。両手で五キロと聞けばまぁそんなんでもないような気がしてくるだろう。だけどね、荷物は全て袋に入っていて、袋の取手の部分はかなり細いと来た。つまり、圧力は相当なパスカルになっているはずでー、つまりはかなーりつらい状況なわけだよ。勉強になったねー。

言って、ネオンちゃんを見ると少しホッとしたような顔になっていた。思っていると、ネオンちゃんはまさに思っていたことを言った。
「……少し安心しました」
「うん？　何がさ？」
「ここで“はい”と答えるようならかなり引いてました」
ネオンちゃん。俺はマゾじゃない。
「ねぇ、俺もう泣いていい？」
「いいですけど、かなりはずかしいと思いますよ？　ここ、結構人通り多いですし」

冗談だよ。
本気にしないでネオンちゃん。
「冗談を本気にしないで、ネオンちゃん。それはそれで俺結構傷つくからさ」
「そうですか。私も冗談のつもりでいったのですが」
分かんねぇよ。
そんないつものクールフェイスで言われたって、つまりは真顔で言われたって誰も冗談だって思わないよ。

まさかまさかのカウンター。ネオンちゃん、かなり強い。ゲームキャラで言うと、短距離も長距離もオールオッケー。さらにはカウンター攻撃も可能という万能キャラ。
しかし、俺が突っ込まれる側に回るとは……。恐るべきネオンちゃん。意外な伏兵、みたいな？
「そうだったんだ。分かんなかったよ」
無論、俺にタメ口を使うような勇気はない。もちろん、嫌われたくない一心からだ。
「そうそう、空兄」
「ん？　何、ネオンちゃん」
「もう少し言葉遣いを男っぽくしないとモテませんよ。私が思うに、空兄がモテない理由はそこだと思うんですよ。ルックスもまぁまぁなのに、ずっと疑問に思ってたんですよね」
ストレートに言ってきやがったよ。
しかも裏目に出てると言いやがった。
ごめんねモテなくて。でもね、ネオンちゃん。そういうのを余計なお世話、って言うんだ。
大体、そこら辺にいる男は皆モテなくて困っているのさ。いや、皆かは分からないけど、大抵の奴等はそうだ。……そうであって欲しい。

「何なら、ネオンちゃんが付き合ってくれよ。そうすれば俺は自分自身を初めて誇れるからさ」
「……」
さっきより引かれたようだ。スッと俺と距離をとった。それも、さっき座っていた距離から約三倍ほどの。
待ってっ。ちょっ、俺と距離をとらないでさ！
「ロリコンだとは思いませんでした」
「冗談だよ冗談。冗談分かってくれよぉ、ネオンちゃん」
「冗談になりません。度が過ぎてます」
俺も少し席をずらし、ネオンちゃんに近づこうとする。
また距離をとられた。
それでもめげずに俺は少し席をずらした。何とかして距離を縮めようとする。
また距離をとられた。
「変態ですか？」
グサリ。
確かに、この行為は変態じみてる。

ネオンちゃん。
俺と二人きりになると、途端によく喋るようになる娘。それも、毒舌になる娘。
だけれども、どうしてか憎めない、そんなネオンちゃんなのであった。

とらぶる１０．．．涙は時に人を騙す

一・五倍の利子のところを、何とか一・一倍の利子にしてもらって俺は何とか昼食を食べることが出来た。一・五倍ってどれくらいか君は分かるか？　二千円の物が三千円になるんだ！

千円の違いが君には分かるか？　漫画なら四冊から六冊も買えるようになる。ランチだったらドリンクバーつけられる上にデザートだって食べられるようになる。どうだ、凄い違いだろう。

しかし、ネオンちゃんも理恵さんも鬼だ。何でお金を貸してくれないのさ。さっきはネオンちゃんのお金だからいいけど、みたいなこと言ったけどそれはそれ、これはこれだろ。

おかげで利子がついた。自給八百円のところで十五分も働かないといけない計算だ。大体、一番安い奴で二千円とか終わった料亭に入ってくれるなよ。一文無し連れてさ。

ハイ。愚痴は終了。

話は一転。俺たちは姫ちゃんのリクエストに答えて本屋に来ていた。俺はというと適当に立ち読みをしたりおもしろそうな小説のチェックをしたりしていた。

そうして、あるゾーンで俺は見た。

「うぅぅぅぅぅぅ～」

「……」

ポロポロと涙を零しながら小説を読んでいた少女を。そして、その少女は本を濡らさないように本を自分の顔から遠ざけている。

通りがかった人はジトーっとその少女を見ていた。ここら一帯に姫ちゃんのフィールドが展開されているらしい、辺りに人はおらず、というより近づけないようだった。

突っ立っているだけってのもおかしいと思い、とりあえず声をか

けてみる。

「……姫ちゃん？」

「あぅ？」

……。

号泣だったらしい。しかも、ずっと泣いていたみたいで、しっかりと涙の後が残っている。

「……どうして泣いてるの？」

「ヒック。だ、だってこの、小説、とっても、感動して……」

……ついさっき思ったばかりだけど、思わせてくれ。

買えよ。

「……買ったらダメなのかい？」

そしてもちろん、口調は優しく。心中と表面では言葉遣いが違うのは誰もが同じ。うん、同じだよね。いや、絶対にそうに決まってる。

僕は背後からそっと姫ちゃんの肩に手を置き、何を読んでいるのか覗き込もうとした。別に、変なことをしようなんていやらしい考えはないと、先に言っておく。

「痛っ！」

「ぇ！？」

軽く触れた瞬間、姫ちゃんはビクリと体をはね上げた。小説を落として俺の手を払う。パチンと綺麗な音がなり、俺の手は宙に放り出され宙に止まる。

その際、一瞬で辺りを見回した――本当に一瞬。動物の身を守るための適応力は凄い――のはもし香織がいたら俺は酷い目にあうかも、じゃなくてあるからだ。

しかし、一体どうして？　俺は軽く触れただけだったのに――

「ごめん。痛かった？　軽く触れただけのつもりだったんだけど…

…」
「あ、いや、いえ、あの、別にお空の兄ちゃんが何かいやらしいこと考えてそうとか、自分の身が危ないとか、襲われるとか、触れられたくないとか全然思ってないですよ！」
「……」
明確な存在の否定だった。
あんまりだった。
……改めて言っておくが、俺は別にそんな少女趣味を持っているわけでもないし、別に興味ないとまでは言わないけど、そんな人前で、ってか人前じゃなくても少女を襲うつもりはない。
確かに俺は健康な一青年だが、精神も“今は”安定していて危険性は皆無。全くの〇だ。むしろ、今の姫ちゃんの言葉の方が危険度は高いと思う。

「……いいよいいよ、本音ぶちまけて。女の子に苛められるのはなれてるから」
「Mですか？」
「違う！」
それだけは譲れない。俺は決して、Mじゃない。そしてSでもない。先ほども述べたがN！　ノーマルだよノーマル！　断固としてこれは譲れない。
大体な、姫ちゃん。苛められるのに慣れているからってMって決めつけるのは偏見だよ。Mっていうのは苛められて喜ぶような変態のことをさすんだ。また一つ学んだね☆

「その文字、そのワードは俺にとって禁句なんだ。言っておくけど俺は優しくないぜ。本当に怒るかもしれないぞ」
「あ、それはないですよ」
「それはない？」
オウム返しに俺は問うていた。はい、と姫ちゃんは頷く。

「だってお空の兄ちゃんは姫ちゃんが泣いていたときに元気づけてくれました。とっても優しく。お兄ちゃん以外にあんなに優しく接してくれる人、初めてだったから姫ちゃんうれしかったんです」
「……」
いい娘だなぁー、素直で。うん。ネオンちゃんとかとはかなり違う。あの捻くれた少女や女生とは全然違うぞ。
「ちょっと変な人ですけど」
ぶち壊しだよ。

「変な人、ね。ま、いいけど。マゾに比べたら」
「え？　Mだから変な人なんですよ？」
君はどうやら人のいい気分を害したいようだね。それとも、さっきの日本語が難しすぎたかな？　俺はね、うん。Mなんかじゃないんだよ。
「……改めて言っておこう、姫ちゃん。僕はMじゃない。これだけは決して譲れない。僕はN、つまりノーマルでありMじゃないんだ。ふ・つ・うなんだよ普通。分かった？」
「うーん。はい、何となく」
笑って頷く姫ちゃん。
『うーん』と『何となく』は余計だけど、可愛かったから許す。

「ところで、姫ちゃんはその本買わないの？」
「えっと、はい。お金ないんで……」
悲しそうな顔になる姫ちゃん。俺もとりあえず同情の声を出しておく。
「そっか……」
そこの君。『買ってあげようか？』というカッコいい台詞を期待したかもしれないが、現実は厳しいんだよ。言ったろ？　俺は今、一文無しなんだ。買ってあげようにも買ってあげられない。

そこでアンラッキーなことに香織がやってきた。あ、ちなみに花園とか香織とか、呼び名が変わることに深い意味はない。気分次第です。はい。

「ん？　姫菜ちゃん……と空。どうしたの？」

オマケみたいに言うな。

「あれ？」

……あれ？　あれって何？

状況を確認しよう。

俺と姫ちゃんは二人っきりだった。以前から姫ちゃんは本に感動して泣いており、俺はたまたまその時にやってきて、その状況に驚いていた。

んで、ちょっと会話していて、そしたら香織がやってきて、だけどまだ姫ちゃんの頬には泣いた跡が残っている。しかも、今丁度本が買えないということで悲しい顔をしている。

……完璧なまでに誤解を招く要素が揃っていた。俺は嫌な予感がして、その予感が当たらないように祈る。しかし、この世に神なんているわけもなく、俺の予感は見事的中してしまった。

「何で、姫菜ちゃんが泣いているの、空？」

声が怖い。

全身に北風があったように全身鳥肌が立った。

「待て香織。いいか、話し合えば分かる。事情をまず聞いて――――」

「女の子泣かしておいて事情も何もないわよ？」

さらに声のトーンがワンランクダウン。ちなみに、俺の血の気もダウン。今の俺の顔は恐らく真っ青。精神もブルー。超ヤバい。

「？」

一人、状況が飲み込めずキョトンとしてる姫ちゃん。さりげなく君が一番の原因なんだぜ、姫ちゃん。これから俺が受ける苦しみの、ね。

この後、俺にかなりの肉体労働が待っていたことは、もう言うまでもない。

とらぶる11．．．たまにはこういうのもアリだろう

しごかれ続けて一時間。俺は文句を一言もこぼさず、黙々と大量の荷物を運んでいる。文句をこぼしてないのは、ちょっと今そんな余裕がないからだ。

声にならない呻きを上げて早足の花園達についていく。……正直、もともとカメ並みに歩くのが遅い俺はウサギ並みに速い花園についていくのは厳しい。

さらに、今この両手の十キロはあろうかという荷物のおかげで、余計に厳しい。腕はとっくに血の気が失せている。恐らく、このままの調子でいくと腕の細胞死ぬ。

……さっきの姫ちゃんの涙の誤解は解けたが、状況にさほど変化はない。ちょっとだけ荷物が減っただけで、重量はほとんど変わっていない。

俺さ、次生まれてくるとき女になりたいな。何、この差は？　非力だからってまったく持たないってのは間違ってるだろ。大体さ、皆なんとも思わないわけ？　この様子を見て。

日頃の鍛錬――花園のしごき、と言ったら分かるか？――のおかげで、今まではなんとか大丈夫だったけど、そろそろ限界のようだった。既に腕の感覚がない。ない、というより腕が元々なかった感じがする。

「ごめん。お願いだから持ってくれ。これ以上これを持ったまま歩くと足もそうだがまず腕がいかれちまう。見ろこの腕を。真っ白を通り越して真っ青だぞ？」

「真っ青ならまだ大丈夫じゃない？」

「バカか！　酸欠起こしてんだよ！　このままいくとマジで切断になっちまうだろうが！　真剣にこれら捨てるぞ！」

「うるさいわね、冗談よ。ホラ、貸しなさい。数分でまた持たせるからね。皆も、ちょっと今だけ持ってくれる？」
目を細くして訝しむように言う。しかし、そんなこと今の俺はまったく気にならなかった。とにかく、この腕の負担を減らして欲しかった。
腕から大量の紙袋がなくなっていく。血流が再び流れ始める感触が分かった。そんな感触、今までで初めてだ。……当然だよな。ここまで荷物を持つ奴は、いないか。
血が流れ始めたことによって真っ青だった腕に一瞬で赤みが戻る。段々と腕の感覚も戻って来た。……今気づいたが、かなり握力が低下している。マジヤバだったみたいだ。
腕の感覚を確かめるように何回も空を握る。その度に何故か痛みが走った。どうやら、長時間のフル稼働によって筋肉が痛んでいるようだ。酸素による回復も出来ないんじゃ、そりゃ痛みが残留するわな。

「っ痛ー」
いくら頼まれていたからって、流石にやりすぎたようだった。いや、頼まれたというより命令された、と言った方がしっくりくるが、別にどっちだろうと俺は請け負ってただろうし。
次第にビリビリと痺れ始めた。……腕を伸ばすと関節も痛む。
「痛むのかい、むーちゃん？」
いつの間にか隣にいた理恵さんが問いかけてくる。俺は引きつった笑顔で大丈夫ですと答えたが、まぁそりゃ引きつってちゃバレるか、真剣な目つきで理恵さんは言う。
「男だからって無茶させすぎてしまったみたいだね。ごめん、むーちゃん。……コンビニがあったら、そこで湿布でも買おうか」
「……はい、お願いします」
やさしい言葉を、素直に聞き入れる。動かす度に激しい痛みが走るまでだから、結構深刻なんだろうし。無理に我慢するよりもちゃ

んと休んでいた方がいい。
「大丈夫ですか、お空の兄ちゃん」
「いや……結構痛いな」
ちょっとやそっとの痛みだったら俺は大丈夫と答える。その俺の性格を知っている花園も一応心配してくれるらしく、ちらりと俺の方を見た。

「無茶は禁物」
「おおぅっ」
気配もなく、俺の隣にいたらしいネオンちゃんがネオンちゃんなりの心配の言葉をかけてくれた。照れてるらしく、微かに顔が赤い。
俺は苦く笑った。普段、声をかけてくれないネオンちゃんですら声をかけてくれる状況に、ちょっと困惑したからかもしれない。
……その際、たまには無茶をするのもいいかも、と思ったのは秘密だ。

♪ ♪ ♪

結局、その日はそれで買い物は終了になった。たまたまコンビニより近くにあったドラッグストアで湿布を買い、理恵さんに張ってもらって、荷物持ちがいないから帰ろうみたいなノリになったのだ。
湿布のおかげか、多少楽になった腕をさすりながら状態を確認する。状態異常、瀕死。あれ以上長く持ってたら冗談抜きでやばかったかもしれない。
……背筋をなぞられたような悪寒が走る。俺はたった今誓った。
……度が過ぎた無茶はしないと。ホント、後悔は先に立たないんだからさ。
「キツいんだったら最初っからキツいって言えばいいのよ。ずっと

我慢しているから悪いの。自業自得よ、自業自得」
ブツブツと言い訳を述べる花園。おもっいきり言ってることとやってることが矛盾しているが、それを言うと何をされるか分からないのであえて言わない。
いや、病人あいてなら大丈夫かな？　……実験してみるのも、悪く、ないかも……。
「お前、キツいって言ったからって本当に持ってくれたのか？　今までの俺の経験上、とてもそうとは思えないんだけど」
「……」
「今までの経験上、ですか……。今までどんなことしてたんですか、お空のお兄ちゃん」
俺の後方で黙る花園前に姫ちゃんがナイスな質問をしてくれる。俺はここぞとばかりに今までの苦労を述べようとしたが、止めた。

どうやら、あいつはあいつなりにちょっと後悔してるらしい。唇をへの字に曲げて、俯いている。それを見て、何だか追い討ちをかけるのも可哀想になった。
まぁ、被害者は間違いなく俺だけど、あの花園が反省してるんだ。いいだろ、見逃してやっても。多分、こんなチャンスは二度とないだろうけどね。
「ま、色々あったんだよ、姫ちゃん」
「色々、ですか」
ちらり、と隣の姫ちゃんは後ろを覗く。あまり聞いてはいけない質問だったと理解したらしく、それ以上の質問はしてこなかった。
……姫ちゃんも、空気は読めるようだ。

「……悪かったわよ」

「！！？」
俺の耳が確かなら、花園は確かに『悪かったわよ』と言った。い

や、俺の耳は確かだった。間違いなく花園はそう言ったに違いない。
……初めて花園が自分の非を認めた。俺は驚きに目を見開いて、返答に困りつつも適当にああ、と答える。

今日は、結構いい日だったのかもしれない。かなり働かされたが、それ相応のものはちゃんと帰ってきた。そんな気がする。
花園はどうやら本当に危ない目に合わせてしまったのならちゃんと謝ってくれるようだ。今日、それを学んだ。うん、結構な情報だよ、これは。
多少の厄介事はあったけど、まぁそれはそれでヨシとしよう。

とらぶる12．．．姫ちゃん

歩きつづけること十五分。俺の腕はまぁ、それなりに回復していて、とりあえず動かしてもさっき程の激痛はない。かといって激しい運動は出来なさそうではあるんだけど。

そろそろ旅館が見えてきた、ということろで俺はまた別の異変に気づいていた。ちなみに、俺の腕に関してのことではない。

姫ちゃんが妙におどおどとしているように見える。俺の気のせいかもしれないが、でも俺にはそう見える。そのことに、花園や理恵さんは気づいていないらしい。当たり前か。だって、明るく振る舞っているだけだもんな。

何というのか、俺は他人の心情の返歌に敏感なようだ。他の人が気づかない些細なことも見逃さず、そういった些細なことから相手の心情の変化を見抜いてしまうらしい。

別に、特殊な力、というわけではない。結局分かることは心情の変化であって、実際にもしかしたら今の姫ちゃんはただハイになっているだけなのかもしれないしね。

ただ、ちょっとさっきとは変わった、ということで。

もしかしたら、何もないかもしれない。

ただ、さっきの件が少し気になって。

「姫ちゃん……どうか、したの？」

一応、尋ねてみる。この質問に馬鹿正直に答えてくれるとはさらさら思っていない。

だったら何故質問するか。理由は簡単。

「どうかしたって……何言ってんの、空。さっきの腕の件で頭もやられた？」

「お前は黙っとれ」

「姫ちゃんですか？　どうかした、と言いますと？」

一見、普通そうに見える姫ちゃん。だったが……だったんだけど、一瞬だけ視線が泳いだことを俺は見逃さなかった。

こういう風に、大抵の人は尻尾を見せてくれるからだ。

まぁ、深追いはしない。

「いや……やっぱり何でもないや。今日は楽しかったかい？」

「はい！」

明るく、元気一杯に答えてくれる姫ちゃん。

……あの時、俺は軽く触れただけだった。叩いたわけでもない。本当に触れただけだったんだ。だけど、姫ちゃんは何故か痛がった。

「……ったく。貧乏性だよな、俺も。関わらなきゃいいのに、いつも関わって損をするんだ」

誰にも聞こえないように。

俺は小声で呟いた。

♪　♪　♪

「皆、先に戻っててくれないか？　俺は姫ちゃん送ってくからさ。ほら、こんな短い距離とはいえ一応危ないだろ？　こんな可愛い娘、一瞬で襲われるぞ」

「アンタが一番危ないわよ。いいわ、私が行くから」

「あーもう。荷物は運びは俺一人で充分だ。早く行け」

姫ちゃんの意見を聞きもせず、俺はひったくるように姫ちゃんの荷物を取る。腕は痛いので、肩に荷物をかけてどうにか荷物を持った。

「行こうか、姫ちゃん」

「え？」

とにかく、さっさと花園達と別れねばならない。それからじゃな

いと、色々と聞くことが出来ない。
俺は早くこの場面を切り上げるために姫ちゃんの手首を握ってそそくさと退場する。その際、花園が何かシャウトしていた気がするが、気のせいでしかないと信じよう。

速歩きで姫ちゃんの家に向かう。……そして、花園達が見えなくなった頃、俺は止まった。
「姫ちゃん、ええと……君、俺に隠していることあるよね」
「は、はい？」
これでもし俺の勘違いだったらマジ恥ずい。多分、その場合この旅館の屋上から飛び降りる。
「俺さ、可愛い娘……だけじゃないんだけど、困っている人はほっとけない質でね。ダチに時間って奴がいるんだけど、そいつの悩み事とかを解決したりしてやってんだ」
ちなみに嘘だ。あんな野郎の悩み事なんか解決なんかしてやらん。
……そもそも、あいつは悩み事を作るような奴じゃないし。むしろ俺が悩み事を解決してもらったりすることの方が多いかも。
「先に謝っておくね。ごめん」
言って、肩に手を伸ばす。
一瞬の動作で姫ちゃんの肩を掴んだ。そうして、結果予想通り。
「痛っ」
姫ちゃんは、痛がって俺の腕を払いのける。そうして確信した。
「……痣か傷。どっちかがあるはずだよね。これぐらいじゃ誰も痛がらないんだ。実はさ、本屋の時から気になっててね。さっきまでは余裕がなかったから考えることが出来なかったんだけど……」
マズイ、って顔をする姫ちゃん。どうやら、ここまではビンゴらしい。
「友達にでも苛められているのかい？」
「……」

しばしの沈黙。

……どれくらい経っただろう。多分、一分も経ってない。だけど、俺はとても長く感じた。

そうして姫ちゃんは、笑った。

「大丈夫です。お兄ちゃんが、きっと約束を守ってくれますから」

「――――約束？」

「はい。後、少しの我慢なんです。だから、大丈夫です」

寂しげに笑う姫ちゃんは、どこか危うい雰囲気を持っていた。俺は思わずしかめっ面になり、そうして俺の出る幕はないと、理解した。

兄妹の関係の方が、強い。

「――――なら、安心出来そうだ。輝さんにはもう話してるってことだよね？」

「……はい」

俺は出来うる限りの笑顔を姫ちゃんに見せた。困っている娘を、ただ俺は見ていることしか出来なさそうだったから、自然に笑えなかったのかもしれない。

でも……。

「姫ちゃん、書くものと紙。あるかな？」

「書くものと紙ですか？　はぁ」

ごそごそとカバンの中を探る姫ちゃん。カバンから手を出したときには、両手にメモ帳と鉛筆が握られていた。姫ちゃんは理解できないという風に首を傾げ、俺にそれらを手渡す。

そうしてさらさらとそのメモ帳に俺の携帯の番号とメールアドレスを書き込んだ。

「携帯、持ってるよね？」

「はぁ。まぁ、一応持ってますよ？　でも、どうしてですか？」

「気が向いたらでいいからさ、輝さんに相談出来ないようなことがあったら連絡してくれ」

目を白黒させる姫ちゃん。だけどやがてにっこりと笑ってはい、と頷いた。こうして、俺は自分の番号とメアドを姫ちゃんに渡した。

午後五時。

姫ちゃんと別れて俺は長い一日を終え、部屋に戻った。

……花園は何となく怒っていたような気はしていたけど、何故かネオンちゃんまで怒っていた……ように見えた。理由？　そんなの、分かったら苦労はしないだろうに。

とらぶる13．．．教育方針

い～い湯だ～な、あはは♪　い～い湯だ～な、あはは♪　なんてのは実に的を射すぎていてもうこれ以上の言葉がない。この曲考えた人、天才だよ。ああ、俺があんたを認める。

いや、まぁ俺はそんな大した人間じゃないが。

気分が今日は一段とよく、俺は口笛を吹きながら花園たちが待つ部屋へと向かう。時間も確認していたので、食事に遅れて花園たちに食べられる心配もない。

フッフッフ。人間、学習するいくものだからね。当然それは俺にも言えることだ。……花園あたりなら、俺が人間というところを否定するだろうな。

気分よくロビーへと出る。そこで、俺は思いがけない人物に出くわした。

ある意味で、人生を左右する。

そんな、意味深な人物に。

♪　♪　♪

『世界ってさ、全ての物事が決まっているような気がするんだよね。……まぁつまり、この世の出来事は全て必然だと思うんだ』

ある友人の言葉。世界あり方は、そう考えると二分される。

一つは世界は決まった道筋をたどっている。

もう一つは、分岐した道を選んでいる。

はて。

どっちなのか、知る者なんていないのに。
俺はたまたま考えてしまった。

「姫菜が今日一日遊んできたって？　養ってやってるだけでも感謝してもらいたいぐらいなのに、それでもまだ足りないっての！？　だから引き取りたくなんかなかったのよ！」

バッタリと出くわした、この人物のおかげで。

和服が異常なまでに似合っている人だった。大和撫子という言葉がふさわしいその女性は、優雅な足取りでスタスタと歩いていく。

姫菜、という単語を口にしていたことから姫ちゃんの母親ということが分かった。

「義理の、ってのを付け足すべきかな。この場合」

老いを全く感じないのは、気のせいだろうか。二十歳後半ぐらいに見える。

小言でブツブツと姫ちゃんの文句を言っているのは、あまり心地よくない。しかも、遊んできたって言ってたしな……。誘ったのは、俺たちだし……。

さっさと部屋に戻ってしまおう。せっかく温泉で気分がよかったのに、害されてしまってはたまらない。

そうと決まったら行動は迅速に。さっさとこの場から退散――

「うお！？」

小さな段差にスリッパの先がかかる！　くぅっ。思わぬトラップに青空の体は対応できません！　馬鹿者！　そこは踏ん張りどころだろうが！　無理です、脳司令官！　馬鹿たれ！　誰がそんな甘ったれ野郎に育てた！！

……俺、つくづく虚しい野郎だな。

思ったところで転倒。っく、何という堕落。何という有様！　青空、これでいいのか！？

ちらり。
ゆっくりと立ちつつ、さりげなく他のお客様を見てみた。
「――――」
俺を見て笑っていた。だけでなく、こんなことまで聞こえる。
何あれ？　いい年こいて何てこけ方？　うわ。かわいそー。でも、今時あんな風に人前でこける人なんてなかなかいないよね。いや、ああいうのは大体が下心あんのよ。きっと女性の下着を見ようとでも思ってんのよ。
畜生っ！　俺が何をした！？　ただこけただけじゃないか！
もういやだ！　帰りたい！　帰りたいよっ！！　大学に行っていつも通りの生活をしたいよ！
……そんな目で見るな。笑ってもいい。だが、そんな目で見るのは止めろ！
「大丈夫ですか？」
「あ、はい。大丈夫です」
脊髄反射。
中でも条件反射という奴を、俺は自然とやってしまっていた。
……まぁ、本当に大丈夫なんだけど。

声をかけてくれたのは、うーむ、皮肉なことに姫ちゃんの義理の母親と思われる人物。さっきすれ違った際に吐いていた愚痴を、思わず忘れさせてしまう口調だった。
「お客様、うちの旅館は段差が多いので気をつけてくださいね」
「あ、はい。以後気をつけます」
俺の答えに満足したように頷くと、軽く頭を下げて笑みを浮かべたまま去っていく。……しかし、何故か俺はこれだけではいけない。そう、思った。
よしとけばいいのに。ホント、俺は貧乏くじが大好きなヤツだな、俺。

「あのー、」
「？　どうかしましたか？」
「ちょっと聞こえちゃったんで言っておきたいんですけど、姫ちゃん……姫菜ちゃんのことなんですけど……。さっき、遊びに行った、って言っていたじゃないですか。あれ、俺が無理やり誘ったんですよ。別に変な思惑があったわけじゃないですよ！　……ただですね、何かつまらなさそうにしていたので、だったら一緒に遊びに行かないか、ってことになって」
「……あなた、姫菜のお友達？」
それは、返答に困る質問だった。
会ったのは昨日。ましてや、ネオンちゃん達と会ったのは今日だ。……友達と呼んでいいのか、俺は少しだけ迷った。だけど、馬鹿らしくなってすぐに考えるのを止めた。
「はい。友達の中の友達です。大親友です」
「そう。なら、とっとと縁を切ってもらえます？」
……は？
今、こいつは、一体何て……。
呆然とする俺を見て、何を勘違いしたのか、この女は言葉を改めて同じことを言った。
「分かりやすく言った方がよろしかったでしょうか？　ならば、絶交、していただけます？」
「……何故です？」
……理由の分からない怒りが、こみ上げてくるのが分かった。それをグッと抑え、俺はピシャリと理由を問う。
「あの子に友人など必要ないからです」

「……それは、何故？」
「あの娘は、実は私の娘ではありません。ご両親は、不慮の自己で

お亡くなりになってしまいましてね。そうして、私たちが引き取ることになったのですが……。そうなるともちろん学校も転校しなければならなくなる。友達がいなくなる、って姫菜、騒ぎましてね。……私の身も安全とは言いきれませんし、またあの様な悲しみをさせたくはないのです。だから、友人など必要ありません」

「綺麗事だろ」

躊躇なく、俺は言った。それだけでは終わらない。終わって何か、やらない。

「友達作んのは誰だって自由だ。それを束縛する権利は、例え親でもない。……悲しませたくないから友達は作らせない？　あんた、それが間違ってるって気づかないの？　なら、俺が教えてやんよ」

それだけじゃない。こいつは……コイツは……コイツハ……

人ガ死ンダッテ何デソンナ軽々シク言エルンダ？

「我が家の教育方針です。口出しするのは、間違っていると思いますよ？」

「……ああそうだな。別にいいさ。あんたの言うことなんか、無視してやるからさ」

気づけば、辺りに人はいなかった。

理由は、恐らくこの女が言ったことなんだろう。

「あなた、今にも人を殺しそうな目をしてますよ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3161g/

とらぶるきゃっちゃー♪

2010年11月20日02時50分発行